



# 生活の歴史を読み取る史料としての「家事教科書」

須崎 文代 (非文字資料研究センター 客員研究員)

私は2014年度より当センターの共同研究「中国・朝鮮の旧日本人租界」の租界地研究に関わらせていただいております。建築・都市という視点から、特に生活に関わる事物に着目して、研究に取り組んでいきたいと考えております。

2012年秋には若手研究者海外派遣制度で、フランス国立高等研究院 EPHE にて調査研究の機会をいただきました。私の博士論文での研究は日本における台所の近代化がテーマでしたので、日本を含む世界の建築の近代化に大きな影響を与えたル・コルビュジェの住宅作品における台所を中心として、各種博物館、図書館における資料調査を含めて研究を進めました。この時の成果は報告として当センターのニューズレター『非文字資料研究』30号に掲載していただきました。



図1 「家事教科書」の例

昨年度纏めた博士論文では、戦前期に刊行された検定済高等女学校用「家事教科書」を分析対象史料として扱いました。「家事教科書」(図1)には、発行当時の生活に関する様々な事柄が記されています。私の研究が対象とする台所のような生活空間の変化を経年的に解

き明かすための資料にはこれまで限界があったのですが、この教科書という資料は一定の水準で経年的な蓄積がある、非常に貴重なものといえます。

建築学領域は建築物や地域・都市の形態や住生活を扱う学問のため、自ずと建築史研究では旧来から建築図面や写真、スケッチ、地図といった非文字資料をもとにした研究が行われてきました。住宅の変遷を捉えようとする場合、家庭生活の様相の変化にも着目すべきですが、特に中流家庭や庶民の住生活を読み取るた

めの資料は、建築関係資料だけでは十分でない状況がありました。そこで博士論文では、戦前期における台所の変遷を読み取るための資料として、文章、図版ともに豊富な情報の蓄積がある家政学関係書、とりわけ「家事教科書」(現在の家庭科教科書)に着目し、台所空間や作業形式の変化と、それらに関わった理念に着目して、戦前期における近代化の過程を明らかにしました。

教科書で扱われた内容は、事実の克明な記録というよりは、当時の社会で一般的あるいは理想的と考えられていたものの記述と考えられます。また、教育上使用されたことから、啓蒙的な内容であるという資料の特質は考慮する必要があります。しかしながら、こうした点を踏まえれば、近代における生活の諸要素を読み解くための資料として十分な価値を有し、非常に興味深い資料といえます。

私がこうした「家事教科書」を手に取り、博士論文として纏めるまでに至ったきっかけは、恩師の内田青蔵教授、そしてそのまた先生である平井聖教授がすでにこの資料の可能性に着目されていたことにあります。平井先生は「家事教科書」に関連する論文を発表されていましたし、内田先生のご自宅のアトリエには、既に「家事教科書」を含む家政書が幾つも所蔵されていました。内田先生より「これを使ってもらって構わない」と、本格的な調査研究への着手を促され、今日に至っております。現在では、かなりの数の家政書を収集し、「家事教科書」については私が古書購入によって収集したものをはじめ、国立国会図書館、国立教育政策研究所 教育研究情報センター 教育図書館、国立国語研究所図書館、(財)教科書研究センター附属教科書図書館、東書文庫 東京書籍附設 教科書図書館所蔵の教科書、および国会図書館サーチ、Webcatの検索により情報を得られた全国図書館の所蔵から網羅的

に収集を行い、内田青蔵文庫と合わせると相当程度の所蔵があります。本稿ではこのような「家事教科書」に含まれる非文字資料について、ごく簡単にですがご紹介したいと思います。

まず、取り上げるのは明治26(1893)年、下田歌子により著された『家政学』(博文館発行)です。下田は、明治18(1885)年に創設された華族女学校(のちの学習院女子部)に、皇后の推薦で教授となった人物であり、翌年には学監に就任しています。その後も昭和11(1936)年に逝去するまで、女子教育の振興と近代化を牽引した先覚者です。彼女の著した『家政学』の内容は、女性によって執筆された初めての「家事教科書」でもあります。その後、明治期、大正期、昭和初期まで多数の「家事教科書」が執筆・刊行されましたが、本書がそれらに与えた影響は多大といえましょう。また、それまでの教科書が基本的に文字のみで著されたのに対し、本書は図版を積極的に採録した先進的な教科書でもあります。

本書中の図像からは、当時の生活に纏わる様々な情報を得ることができます。例えば、座る際の手の重ね置き方(図2)から、水の浄化方法(図3)、床飾りと違い棚の設え(図4)のように、説明入りで図示した図版からは、具体的な生活様式や空間・設備の様子が窺い知れます。図4の床飾りからは、かなり高級な住まいであることが窺い知れ、この当時の女学校が想定していた教育対象が上流階級を中心としていたことが推察されます。

その後、大正期や昭和初期に発行された「家事教科書」は、中流階級の子を対とした内容へと変化します。そこでは食品化学や建築の環境工学など科学的な教育内容が盛り込まれ、掲載図版も質、量ともに充

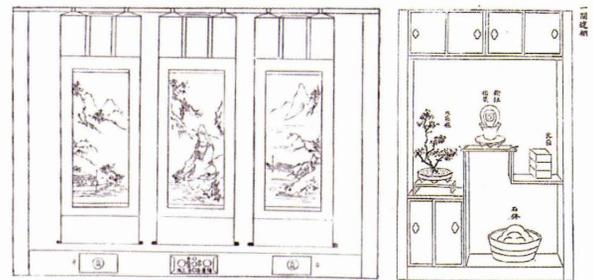


図4 床と床脇(違い棚)の装飾

実していきました。それとともに、図5(出典:西田博太郎、高橋學而ほか『実践 家事新教本 改訂版』帝国書院、昭和10(1935)年)として取り上げた、割烹着を着けて洗濯を行う女性の姿のように、大正期、昭和初期の教科書では家事労働の方法を具体的に説明する図像が見られ、当時の家庭生活に関する詳細な情報が記録されています。



図5 洗濯方法「洗ひ方と搾り方」

このような「家事教科書」が発行された明治・大正・昭和初期、すなわち家政学原論が形成される時期の住居論の展開については未だ殆ど明らかにされておらず、今後取り組みたい大きな課題であります。また、「家事教科書」は日本統治時代の朝鮮や台湾でも同種のもので発行されていました。この資料については、各国でデータベース化が進んでいることが分かっており、今後、国内のものとの比較研究を展開できればと考えております。

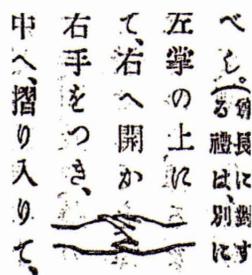


図2 手の置き方

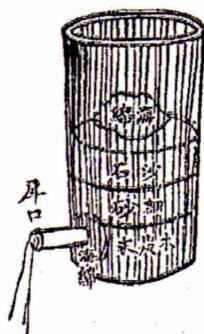


図3 「水を良くする法」